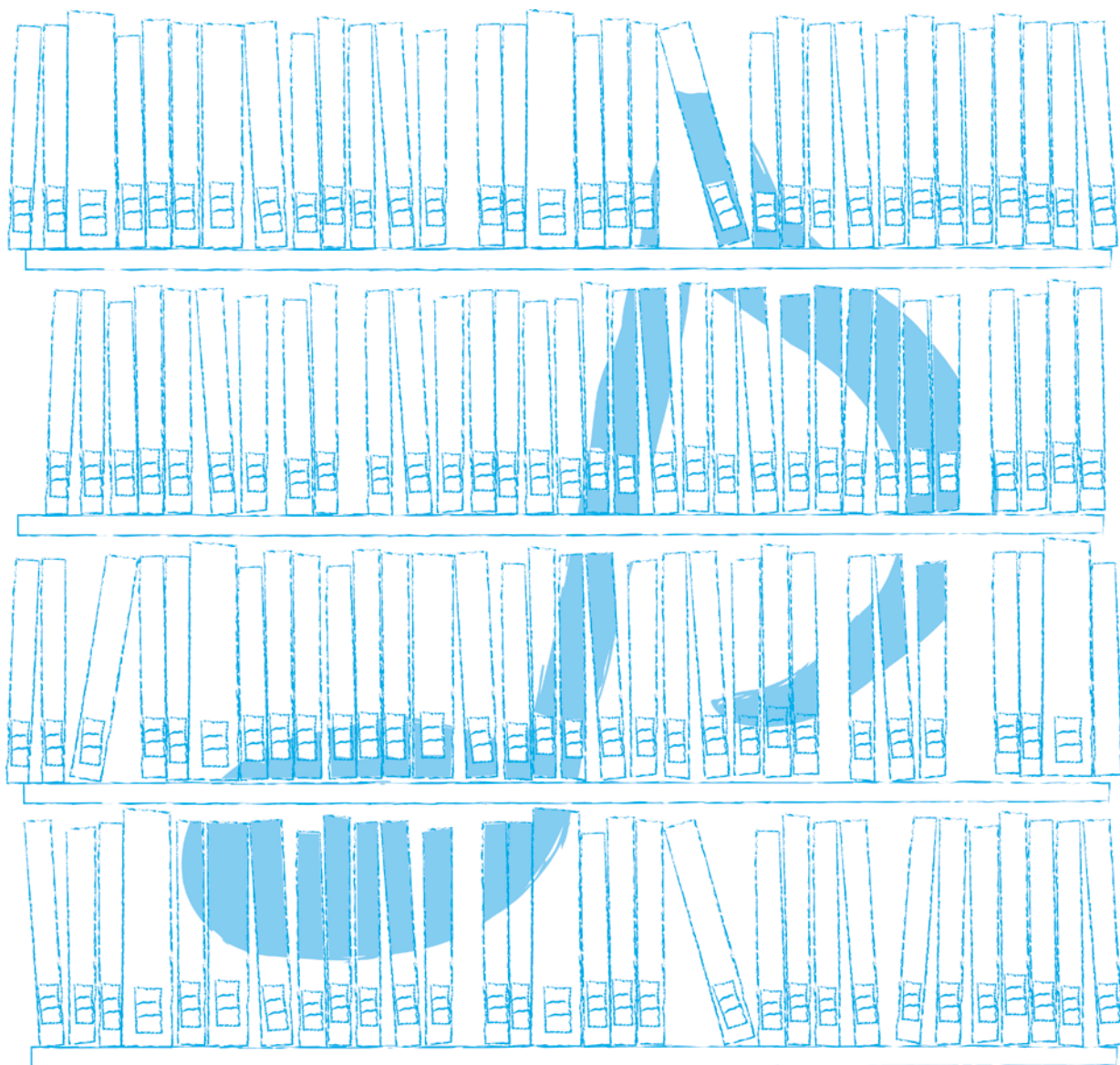


Parlando

ぱるらんど 「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

272



Contents

- 「文化を求める心」の再生…田中延男 ● 1
- Parlando Interview ああこういう音楽がしたい！…山本英助先生 きき手・市川利次… ● 2
- 図書館委員の先生からのおすすめ ～このDVDあの図書～ ⑥… ● 6
Rhythm is it! = ベルリン・フィルと子どもたち / 井上恵理
対話録「さすらい人」 プレンデル / 江澤聖子
- 永遠に残る一瞬…大関学 ● 7
- 図書館員のノートから 参考図書のご紹介 ⑨
ゲテ時代のワイマール宮廷楽団で使われた楽譜たち…小関康幸 ● 8
- ピープル・ぴーぶる ⑩ ポビー・マクファーリン…高田涼子 ● 9
- 図書館と著作権と資料の複写（その6）… ● 10
- 雑誌の部屋 ⑪… ● 11
- 図書館のう・ご・き…松浦淳子 ● 12
- 館長室へようこそ ⑫… ● 13
- 図書館のう・ご・き～続き～… ● 13
- CD/BOOK/楽譜…小竹真鈴・瀧川幸裕・齋藤卓 ● 14
- Information… ● 16

「文化を求める心」の再生

田中 延男

高校二年生の夏の日のこと、私は、市の図書館主催で開かれた「レコード・コンサート」に参加し、鮮烈な感動を経験したことがある。プラタナスの木々に囲まれた、大正時代の建築を思わせるレンガ造りの古びた図書館。レコード・コンサートは、その芝庭で行われ、プラタナスの木陰には、百人ほどの市民が思い思いに腰を下ろしていた。

担当者の説明後、二つのスピーカーから流れだしたのは、メンデルスゾーンのバイオリン協奏曲ホ短調であった。曲の美しさはもちろんのこと、ジノ・フランチェスカッティが演奏しているバイオリンのなんと透明で、深々とした音色であったことか。私はただ感動し、このような音楽文化に満たされていることの幸せを覚えたのであった。信濃の青い空には雲が流れ、芝生の上をわたる風が心地よかった。

感動の余韻が残ったまま、私は夢中で閲覧室に駆け込み、バイオリンに関する本や、メンデルスゾーンの伝記などを探して読みあさった。そして、これがかきつけとなり、図書館で勉強したり、その合間に本を探して読んだりすることのおもしろさを実感したように記憶している。また、その後、音楽鑑賞、特にバイオリンの音楽を聴くことと読書は、私の生涯の趣味となったのであった。

ところで、その図書館では、図書館としての機能だけでなく、住民の絵画や書などの展覧会、著名人による講演会、地域の物産展、輪読会、そしてレコード・コンサートなど、多彩な文化的行事が頻繁に開催されていた。当時は、現代のように立派な市民会館やコンサートホールなどが整備されていなかった

が故に、図書館は「市民の誇り高き文化の中心地」としての役割を担っていたのであった。

今思えば、昭和三十年代後半までは、まだ物資も文化も極めて乏しい時代であった。それ故に、人々は、希少な文化的行事に接する機会を逃すまいと努めていたように思う。そうした機会が少なかったために、その時の私も、より新鮮な感動を受けたのであろうし、また図書館に通うことを誇らしくも思っていたのである。そういえば、母校の校歌に、「豊かなる文化求めて その心高く清かれ」という一節があったが、「文化を求める心」は人に生きることの喜びを与えてくれる。書物にしても音楽にしても、求める心から得た知識や感動は、その人にとつて常に本物の血となり肉となるのである。

さて、今の時代、書店には次々と様々な書籍が並べられ、その種類と量の多さに驚く。店先からあふれ出るほどの本の豊かさは、逆に子供たちの「読書意欲」や「知的好奇心」を奪い去っている側面があるかもしれない。書籍だけでなく、あらゆる物や文化の豊かさ、便利さは、まぎれもなく人々の「求める心」を委縮させ、価値あるものに出合った時の新鮮な驚きや知的好奇心を枯渇させているように思えてならない。

東日本大震災以来、日本人の「ライフスタイル」を見直そうという動きが始まっている。「量」から「質」の時代にといい掛け声も多く聞かれるようになった。日常の豊か過ぎる、便利な生活の中に埋もれてしまった、価値ある「文化を求める心」を、一日も早く取り戻さなければならぬ。

ああこういう音楽がしたい!

山本 英助 先生

山本 英助 (やまもと えいすけ)

東京シティーフィルを経て、南西ドイツフィルハーモニー管弦楽団に15年間首席トランペット奏者として在籍。ドイツを中心にヨーロッパ各地やアジアで演奏会や録音などの演奏活動を行った。オーケストラではソリストとしても活躍した。帰国後も毎年ヨーロッパ各地に招待され、ソリストとしてまたオーケストラプレイヤーとして演奏を行っている。特にオルガンとの共演をソロ演奏活動の中心としていて、ヨーロッパや日本各地の教会、コンサートホールで演奏し好評を博している。日本ではNHK交響楽団、東京交響楽団他多数のオーケストラに客演。アンサンブル・ファータ・モルガーナ主宰。クニタチ・フィルハーモニーカー、トランペット集団「パツラー」に所属。
現在、国立音楽大学准教授、洗足学園音楽大学客員教授、桜美林大学講師、日本トランペット協会常任理事、日本金管バンド指導者協会理事。



笑顔の素敵な山本先生! インタビュー終了後も、スタッフの笑顔はしばらく消えませんでした。

いつも楽しそうに

— いつも楽しそうに皆さんとお話されていますが?

山本 時間がある時は学生達とお昼を一緒にとろうと。最近どういふことがあったとか、そんな話も含めてレックスではできないような話をしています。

— 金管の皆さん、この頃はさすがにこやかに……。

山本 昔は男しかいなかったですから、入学したら体育会系の大学に入ったようなイメージがあって、大きな声で返事をするとか、そういう挨拶からまずやらされました。 — 会話も日常も活き活きしてなければ、演奏だけ、活き活きさせようとしても無理とか?

山本 音楽には、人と人とのつながりが大切ということがあるのかもしれない。ただ、私は食べることが大好きなので、一緒においしいものを食べながら会話を楽しみたいだけ。音楽の教育と直接結びついているのかどうか?

憧れのトランペット

— トランペットと出会われたのは?

山本 小学生の頃、東京オリピックがあって、その時一番最初

に、長〜いトランペットで吹いていたファンファーレがあったんです。ぜひやりたいと思い、中学の吹奏楽部で、トランペットを希望したら、楽器がない。で、今空いているのは指揮だから、棒振れって、言われ…。二年になってようやく楽器が空いて、コルネットを吹き、それからトランペットになったんです。

— ファースト・トランペットは?

山本 中学生の時、毎日、《士官候補生》を口笛で吹いて通る高校生がいたんです。私ที่บ้านでトランペットを練習していたら、ある日、その方が家にいらして、「今度、吹奏楽部で指揮者になったから、誰かこのトランペット買う人いないかな」と。それが自分で買った最初のトランペットです。その方とは未だにお付き合いがありません。

トランペットを始めたばかりの頃、「お宅、トランペットやってるんでしょ。うるさくて大変でしょう」という声が部屋に聞こえてきました。すると母は「いや、そんなことないです」と言ってくれました。それは未だに感謝しています。近所の方には、下手くそなトランペットでご迷惑だったでしょうね。

素晴らしい同級生!

— 国立音大を目指されたきっかけは?

山本 ブラスオルケスタールのレ

コードで、藤田玄播先生の素晴らしいアレンジの《夏の思い出》を聴いて、こういう吹奏楽団と一緒にやってみたいなと思ったので。

出れば就職率が二〇％と言われていて、吹奏楽を教えられる先生は引く手あまたでした。しかし、教育実習に行つて挫折したんです。

劇場の楽屋で受けました。「じゃ、いつから来るか」と受け入れてくださることになり、卒業後、学生のときから所属していた東京シテイフィルのユーゴスラビア演奏旅行についていき、日程終了後、別れて私はロンドンに行きました。

クラス全員が集まって音階練習があるんです。ドイツ人は体が大きいし、体力があるので、みんな朝からすごい大きい音を出す。で、私は早めに行つて音出しをしてから一緒に練習していました。でも、先生の音は、もつと大きな音なので、みんな吹いても先生の音しか聞こえないのです。先生がどうしてああいう大きな音で、みんなの音を飛び越えて吹けるかというのには、未だにちゃんとすることは分らないです。

山本 先輩が怖かったですね。練習にあまり熱心ではないと思われたいから……。運動音痴なので、大学へ入ったら何か運動をしたいと思ひ、テニスクラブに入りました。四時ぐらいから二、三時間テニスをやるというか、ローラーを引かされて、球拾いをさせられてと、そんなことをして、陽が落ちたらまた暫くトランペットを吹いて帰るみたいな生活をしていました。

魂を燃焼させ尽くす演奏

山本 フィリップ・ジョーンズ先生は、まず、「音楽について私は色々アドバイスできる。だけど、トランペットを吹くテクニクについては教えられない」とおっしゃるんです。だから最近、シカゴから帰ってきた若手のジョン・ミラーのところに行け。若いからレッスン代も安いし、毎日行つてもいいから行け」とおっしゃってくださり、一日おきぐらいにジョン・ミラー先生の家に朝八時頃行きました。一時間ぐらい一緒に練習して、それから先生はオーケストラのリハーサルなんかに行く。それを見学させてくださったり、セミプロ級のオーケストラを紹介してくださり、色々な曲の演奏をさせていただったりしていました。

山本 うーん、そうですね。やっぱり体力ができたのか、それともラップを吹くにあたっての力が抜けてきたのか、そういうことかもしれないですけどね。

山本 永井宏先生、武田忠善先生、大倉由紀枝先生、田中淑恵先生、駒沢とみ子先生、神原雅之先生……。

山本 桐朋学園大学のオーケストラが志賀高原で合宿をやっていたんですが、四年の時、祖堅方正先生が私を運転手を兼ねて連れて行つてくださり、ずっと聴いていました。最後の演奏会に斎藤秀雄先生が車椅子に乗られてモーツァルトの《ディヴェルティメント》を指揮されました。：何か本当に人間の魂を燃焼させ尽くすような演奏だったんです。：それを聴いて、ああ、こういう音楽がしたいなと思つたんです。それからです。演奏家になりたいと思つたのは。卒業してどうするかと考えていた時、祖堅先生の先生にあたるフィリップ・ジョーンズ先生がブラスアンサンブルを率いて日本にいらしたんです。祖堅先生が、「卒業したらロンドンに行つてみないか」とおっしゃってくださつて、演奏旅行中のフィリップ・ジョーンズ先生のレッスンを日生

山本 フィリップ・ジョーンズ先生は、まず、「音楽について私は色々アドバイスできる。だけど、トランペットを吹くテクニクについては教えられない」とおっしゃるんです。だから最近、シカゴから帰ってきた若手のジョン・ミラーのところに行け。若いからレッスン代も安いし、毎日行つてもいいから行け」とおっしゃってくださり、一日おきぐらいにジョン・ミラー先生の家に朝八時頃行きました。一時間ぐらい一緒に練習して、それから先生はオーケストラのリハーサルなんかに行く。それを見学させてくださったり、セミプロ級のオーケストラを紹介してくださり、色々な曲の演奏をさせていただったりしていました。

山本 うーん、そうですね。やっぱり体力ができたのか、それともラップを吹くにあたっての力が抜けてきたのか、そういうことかもしれないですけどね。

山本 永井先生と田中先生とは、学生の時、一応、神奈川県人会というのがあって（笑）、年に一回か二回、バッハのカンタータを中心にいろんなものをやりました。ホールを借り、皆で企画して……。未だに一緒にお仕事をさせていた

山本 そうですね。

山本 そうですね。三年間勉強したので、一方では、日本に帰ることも考えていて、楽譜とか重たい荷物は既に全部日本に送つていたんです。入団試験を五、六回受け、最後のチャンスだと思つて南西ドイツ、コンスタンツにあるオーケストラを受けに行つたら受かったんです。

山本 そうですね。三年間勉強したので、一方では、日本に帰ることも考えていて、楽譜とか重たい荷物は既に全部日本に送つていたんです。入団試験を五、六回受け、最後のチャンスだと思つて南西ドイツ、コンスタンツにあるオーケストラを受けに行つたら受かったんです。

山本 吹奏楽の指導教員になりた

山本 そうですね。

山本 そうですね。

山本 そうですね。

山本 吹奏楽の指導教員になりた

山本 そうですね。

山本 そうですね。

山本 そうですね。

山本 吹奏楽の指導教員になりた

山本 そうですね。

山本 そうですね。

山本 そうですね。

ヴェーゼニク先生のレッスンが、

入団試験のことしかやらない、職業訓練なんです。ドイツのオーケストラではこういうふうな吹くんだよということがレッスンの中心で、ソロの曲ももちろんやるんですけど、年に十四、五曲ですか。あとはほとんどオーケストラの吹き方。それとコンチェルトをやるというレッスンだったのです。

ベルリンだとやはりロータリー式ですか？

山本 そうです。ベルリンはもうほとんどB管といって、B♭の調のロータリー・トランペットです。

それを基本にして受ける？

山本 ピストンで、まあ受ける人もいるかな。しかし、やっぱりドイツのオーケストラはB♭の調のロータリー・トランペットでコンチェルトとオーケストラの難しいパッセージを吹いて。

イギリスのオケとドイツのオケは同じ曲を吹いても、求められる音色が違う？

山本 最近、オーケストラがインターナショナル化していて、フランスのオケもアメリカのオケも似たような音がするんですけど、やはりドイツのオケは、野太いというか、そういう響きがしますね。

体力がないと。

山本 ビール腹ですか？ああいうのが（大笑い）。

B管でスイス軍の行進を

まずは招待状が来ないと試験も受けれない。

山本 “Das Orchester” という雑誌があって、各オーケストラの募集広告が出ているんです。そこにトランペットとあると、必ず応募するんですけど、応募を二十通しても、招待状は一通来るか来ないかですね。やっぱり外国人だし、その辺は厳しかったのではないのでしょうか。うまく私が招待状をいただけたのは、先生のお陰だと思えます。

最終試験はどのようだった？

山本 三次試験は二人か三人残るんですけど、招待状に書いてある以外のことを初見でやらされるんです。決め手は『ウィリアム・テル』のスイス軍の行進だったかな。C管でやれば難しくないが、B管でやると難しいみたいなのところを、「これはどうだい」「これはどうだい」と色々出してくるわけです。

技量試験を通過しても……

山本 試用期間が半年ぐらいあります。演奏会でちゃんと演奏することができるとかというのと、それから仲間どうしとかというのを見るかどうかというのを見てくれる期間なんです。

半年はつらいですね。

山本 まあ普通にしていればいい

ので、日本みたいに必ずどこか居酒屋に肩を組みながら飲みに行くということはあんまりないんです。皆、結構仲良くしてくれました。

日本へ戻る

お子様達の日本語教育に『ドラえもん』が役立つってとか？

山本 『ドラえもん』は、私も読みたかったんですけど（大笑い）、なかなか日本の本は手に入らない。私か家内かどちらかの母親が送ってきて、子供は多分初めは絵だけを見ていたんでしようが、それが日本語を覚えるのに随分役立つみたいですね。

日本に戻れるきっかけは？

山本 桐朋の先生から、「桐朋学園がオーケストラ学院を作るので、その専任に帰ってこないか」「演奏もできるし」と言われ、考えたらんです。子供が小学校を卒業するぐらいだったので、これを逃すと絶対に日本に帰れないなと思って。

日焼けして、顔がポロポロ

4月の昭和記念公園の、くにたちブラスクワイヤーのチャリティー・コンサート、拝聴しました。

山本 学生が是非やりたいというので、色々コンタクトをとったから、ちょうど催しが立川であつて、うまくタイアップできました。授業でやっているオーケストラとか

吹奏楽は外に出にくいんですけど、サークルだったら、明日にでも演奏ができるという面があるので。

被災地の方々のため何かできないか？と演奏や裏方に徹している。そういう気持ち。ジンをききますね。それに、ブラスが聴こえたら集まって来て、義援金を入れてくださるお客様もいらして。

山本 それは良かった。お陰さまで日焼けして、顔がポロポロ剥けました（大笑い）。機会があれば、ほんとにそういうのにどんどん参加させていただきたいと、学生もみんな言ってます。

パイプオルガンのような響き+

くにたちブラスクワイヤーについてお伺いしたのですが？

山本 響きに憧れ、イギリスにあるような金管バンドをやりたいという学生が結構いて。パイプオルガンのような柔らかい響き。それをやっていこうと。イギリスのを基本にやっていますが、それだけだと枠が狭まってしまおうので、うちのブラスクワイヤーは、オリジナルのブリティッシュ・ブラスの編成に通常オーケストラで使うトランペットとかフレンチホルンとか、チューバなんかと一緒に演奏し、柔らかい響きの中に、華やかな金管が入った新たな豊かさを試みようとしているんです。演奏会の中では二つに分けてやってい

当館所蔵のCD・図書・楽譜



「Windows」
XD51280
G-face



「マリアの子守唄」
XD63617
コジマ録音



「アルチュニアン
トランペット協奏曲」
E14-363*1
全音楽譜出版社



「管弦打楽器の新しい
楽器学と演奏法」
J120-045*2
ヤマハ

ます。前半はオリジナルの編成で、後半は少し拡大して、そういう音色の可能性を探っているのです。

質の高い練習 & 別のこと

— 学生さんに、今やっておいてほしいことについて—

山本 基礎的なことをたくさん勉強してほしい。それを今きちんと身につけて、将来、社会に出た時に基礎的なことを忘れないで仕事を

続けていけるような人になってもいい。私はいつも思っています。それと質の高い練習！今は可哀想に三号館の廊下で吹いて練習していますが、みんな一緒にいるのは、心強くて楽しい気持ちはよく分かるんですけど、やはり自分の練習はどこか籠ったところで、一人きりでやってほしい。そうしないと、密度の高い時間が持てないんです。ああいうふうにもんなで練習していると、何となくダラダラと吹いてしまい、緻密でなくなり、良い練習にはなっていないんじゃないかと思うのです。

学生に言うんですよ。「一日そこで座って吹いているんじゃないやなくて、何時間か時間を決めて練習して、あとは本を読むとか、映画を見に行くとか、何でもいいから別のことをしたほうがいいよ」と、密度の高い練習を五時間するのと、全然密度のない練習を五時間するんだったら、密度の高い練習を一時間したほうがずっといいよって。

ご抱負・ご予定

— ご抱負やご予定をお伺いしたいのですが？

山本 ブラスクワイヤーと演奏旅行に行きたいですね。スコットランドのアバディーンで世界青少年音楽祭をやっているんです。ロンドン留学中に行つたのですが、世

界中の人達と交流が広がって、非常に良い経験だったと思うのです。そういうところに連れて行ってあげたいなと思っています。五年前フィンランドに行った時は、学生に日本の曲を編曲してもらって持っていました。一曲は日本っぽいメロディをアレンジしたオリジナル曲だったのでですけど、もう一つは《八木節》をアンコールで買ったんです。「ドン・キホーテ」で買ったハッピーを着て、最後の一番大きい演奏会で、そのハッピーをみんな脱いで、客席に投げ入れて。

山本先生おすすめの本

- 「響響の扉1〜4」浅田次郎 講談社文庫 (TAC:津田塾大学所蔵)
- 「珍妃の井戸」浅田次郎 講談社文庫
- 「中原の虹1〜4」浅田次郎 講談社文庫 (TAC:津田塾大学所蔵)

コメント
浅田次郎の中国三部作です。日本人は、清王朝崩壊から蒋介石にいたるまでの中国の歴史を知らなすぎます。本書は事実と創作が上手くつながら面白い読み物になっています。

うわあ、いいですね。

山本 それと今、楽譜は、いろいろ手の入った実用版や、原典版とは言っても現代の演奏法に合わないアーティキュレーションが施されている楽譜しかないのです。そこで何も書かれていない白地図のような楽譜を作ろうとしています。今年の暮れか来年ぐらいには出版する予定なのですが…。オーケストラ部分は音大生でもすぐ弾けるようなピアノ編曲にしていたらいいと今村央子先生にお願いし、トランペットの譜面は学生自身がアーティキュレーションを書き込んでいって勉強するような楽譜を作りたいと思い、フンメルとハイドンの曲をやっているところなのです。

今日本当に楽しいお話ありがとうございました。

— 今日本当に楽しいお話ありがとうございました。

— 今日本当に楽しいお話ありがとうございました。

図書館員のおすすめ資料は本文中で触れている作品が図書館にもあります

*猫好きの先生が最近演奏会で演奏された曲も含まれています

CD 「Brass Cats」 (請求記号 XD66268)

楽譜 「Three more cats」 (請求記号 Dr.●H39-787)

楽譜 「Brass cats」 (請求記号 H45-866)

*桐朋学園大学オーケストラの志賀合宿

CD 「齋藤秀雄の芸術II」 (請求記号 ●●XD30763/66)

CD 「Brass Cats」 XD66268 Klavier Records

● いかわとしつぐ 楽器や楽譜?タンギング?猫?何をお聞きしても、笑顔で、あふれるようにお答えくださる山本先生、とても頁数が足りません。この上は、ご執筆の本やばるらんの記事、ホームページをご覧ください。先生のCDを聴いていただくしかありません。

*1 オーケストラスコアの解説
*2 トランペットの項担当

図書館委員の先生方によるリレー連載のおすすめ資料紹介です。今年度から第2シーズンになりました。

Rhythm is it! =
ベルリン・フィルと
子どもたち

井上恵理

これは2004年、ベルリン国際映画祭で多くの人々を感動させたドキュメンタリー映画である。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者サー・サイモン・ラトルの呼びかけで展開された6週間のダンスプロジェクトの記録である。年齢も文化的背景も異なるベルリン在住の子どもたち250人。クラシック音楽も知らず、踊ることも知らない。そして、将来への不安、社会への不信感もさえ抱いている若者たち。その子供たちが、6週間の間に見せる変化を映像は追っている。その変化を生み出したのがイギリス出身の2人の舞踊家と指揮者ラトルの人間と芸術に対する深い情熱、そして音楽の力だ。音楽はストラヴィンスキーの「春の祭典」。この作品は様々な振り付け家やダンスカンパニーが素晴らしい舞台にしているが、プロではない子どもたちの姿はそれ以上に何かを伝える。音楽が子どもたちの身体の中に吸収され、自身自身をみつめる成長のための栄養として消化していったと私は感じた。

ベルリン・フィルを振るラトルの姿、目の輝きに魅了される。すばらしい芸術家、そして人間だ。彼は語る。「芸術はぜいたく品ではなく必需品だ。水や空気と同じように生きるために必要なものだ。」そのことばに、私は深く共感する。



請求番号●VE2067～2068
『Rhythm is it! =ベルリン・フィルと子どもたち』
Imagica, REDV-00261

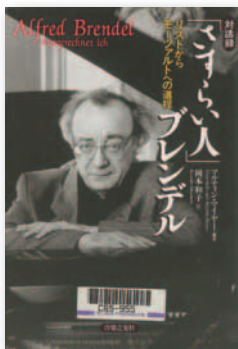
●いのうえり 本学准教授(リトミック)

対話録「さすらい人」
ブレンデル

江澤 聖子

私にとってベートーヴェンは、彼の温かく力強い音楽によって沢山の慰めと勇気を与えてくれる心の友として、また数々の困難と不幸に見舞われながらも芸術家としての使命感を持ち、誇り高く誠実に生き抜いた一人の人間として最も敬愛している作曲家である。そしてそのベートーヴェン解釈者、演奏家として私が最も共感し、信頼しているピアニスト

はアルフレード・ブレンデルである。とりわけモーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、シューベルト、リストの音楽に深い造詣を持ち、明快で隙のない構成感の中に豊かな抒情性と繊細さを併せ持つ彼の音楽は、楽譜を深く緻密に読み込む探究心と幅広い知識、また様々な音色、強弱法、速度法を絶妙に使い分ける高い技術力と感性によって丹念に磨かれ練り上げられたものである。私も10代の頃から彼の録音を聴き続けているが、そこからどれだけ多くを学んだことか。この対話録には彼が若い頃どのようにピアノと共に過ごしてきたか、芸術論、一音楽家としての姿勢などが生き生きと書かれている。「ピアノを弾く哲学者」というイメージを持たれていることについて彼は次のように答えている。「すべては感情から発せられ、人を介した感情として戻ってこなくてはならない。感情の質を観察し、理性という感情のフィルターを使って高貴で重要なものとそうでない偽りのものを区別するのである」。彼の深い知性と情感のバランスの素晴らしさは、私の永遠の憧れであり目標でもある。



請求記号●C65-955
『「さすらい人」ブレンデル』
ブレンデル[述] 岡本和子訳
(音楽之友社)

●えざわせいこ 本学准教授(ピアノ)

この本と共に、2008年に行った77歳での引退公演のライブ録音「THE FAREWELL CONCERTS」請求記号●XD63985～6のCDも是非お薦めしたい。60年間の演奏活動の締め括りにふさわしい、最高の極みに達した名演である。

永遠に残る一瞬

大関 学

思ってもみなかつた大きな出来事があった以来、いろいろなことが今までとは違って感じられるようになりまして。

音楽の聴き方についても、これまでより以上に、心に響くこと、心に寄り添うことを強く意識するようになった方も多いのではないのでしょうか。

素晴らしい演奏も、本来はその一瞬で消えてしまうものです。

録音する技術がなかった頃は、どんな名演奏も、それを聴いた人の心の中にしか残らず、我々は残された証言や記録から知るだけでした。

その後、多くの素晴らしい演奏が記録されるようになり、その時、その場所にいなかった人でも聴くことができるようになりました。今回は、その中でも、録音されてから50年ものあいだ魅力を失

わず、ますますその輝きを増している演奏についてご紹介したいと思います。

ジャズ・ピアニストのビル・エヴァンスが、スコット・ラファロ（ベース）、ポール・モチアン（ドラムス）とともに、1961年6月25日に、ニューヨークにある「ヴェレッジ・ヴァンガード」というジャズ・クラブに出演したときの演奏です。

彼らはピアノ・トリオとして2枚目のアルバムを収録後に、各地で演奏活動を続けていました。

録音を聴いてみると、演奏中にも、食器の触れ合う音や、客の会話、時には笑い声なども聞こえてきます。この点、クラシック音楽のコンサートとはずいぶん異なる雰囲気がします。

店内の様子は、歴史的な名演奏に立ち会っているという気負いはあまり感じられず、むしろ非常に

リラックスしています。

一方で、演奏はとても集中していて、何度聴いても、その対比が不思議に感じられます。

このメンバーによるピアノ・トリオは、ピアノとベースがまるで対話をするように演奏し、それをドラムスが支える、というスタイルが特徴です。

そして聴いているうちに、周りのざわめきが気にならないくらい、演奏に引き込まれてしまいます。

この時の録音から、2枚のアルバム（当時はLPレコード）が作られました。そのうち、2枚目に発表された『ワルツ・フォー・デビー』は、ビル・エヴァンスの代表作のひとつとなり、そしてジャズの歴史を飾る重要な作品になりました。

この日の演奏のあと、メンバーの1人に過酷な運命が訪れ、この3人による演奏は二度と実現しませんでした。

でも、そういう悲劇的な要素だけがこの作品の価値を高めているのではないと思います。一瞬で消えてしまうはずの演奏の中に永遠に刻み込まれた何かが、いまでもずっと聴く人の心に響いてきているのだと私には思えるのです。

このアルバムは、よくジャズの入門盤としても紹介されています。

とても聴きやすく、またそれだけでなく、何度聴いてもみずみずしく、聴くたびに新しい何かを感じさせてくれるアルバムだと思えます。あまりジャズは聴いたことがない、という方にもぜひ聴いていただきたい作品です。

今回ご紹介したこの作品の他にも、いろいろなジャンルに、たくさん名演奏が残されています。

そして皆さんは、これからいろいろな演奏を聴く機会がたくさんあると思います。

その中で、いつまでも忘れられないような、そしてやがて伝説として語り継がれるような、素晴らしい演奏に出会うことになるかも知れませんね。

参考資料

CD

◇『ワルツ・フォー・デビー』ビル・エヴァンストリオ（請求記号・O2447）

◇『ワルツ・フォー・デビー』ビル・エヴァンストリオ（請求記号・O16576）*ボーナス・トラック収録

◇『サンディ・アット・ザ・ヴェレッジ・ヴァンガード』ビル・エヴァンス・トリオ（請求記号・X058877）

◇『中山康樹・ビル・エヴァンスに会ったとき』の事柄（請求記号・J044673）

◇『ヘレン・ラファロ・フレデリック・テイラー・ピアノ』（請求記号・J119773）

雑誌

◇『ビル・エヴァンスのワルツ・フォー・デビー』録音50周年記念特集『ジャズマガジン』2011年7月号（請求記号・P2853677）

◇『ワルツ・フォー・デビー』録音50周年『Jazz Japan』2011年7月号（請求記号・P5560111）



請求記号 ● X-036/(45)/B

ゲテ時代のワイマール宮廷楽団で 使われた楽譜たち

小関 康幸

お城が火事だ!

Cornelia Brockmann 編『Der Weimarer Katalog über Noten für Instrumentalmusik um 1775』(Sinzig: Studio-Verl, 2010) は、1775年頃から1835年頃までの約60年間にワイマールの宮廷楽団が所持していた器楽曲の楽譜在庫目録です。「えっ? 1775年頃ではないの」と思う方もいらっしゃるでしょうが、この点はまた後で触れましょう。

1775年頃のワイマールは74年に城が焼けてしまい、75年、アンナ・アマリア妃は長男カール・アウグスト公とともに楽譜の新規購入を決定します。アンナ妃は芸術のパトロンとして知られ、自ら作曲もし、85万冊の蔵書を誇る図書館の創始者でもありました。ワイマールは75年以降、ゲテ、ヘルダー、遅れてシラーなどが住む、いわゆる文化都市でした。

構築された楽譜のコレクション

さて、本書は交響曲、序曲、幕間音楽、協奏曲、弦楽四重奏曲などの在庫目録で項目数が1,000を超えます。これらは1835年までのあいだに購入を繰り返して形成されていったコレクションです。タイトルに含まれる「um 1775 (1775年頃の)」は、宮廷演奏会の重要性が増した時期と新しい楽譜の収集が始まった時期が一致したからとの解釈が有力のようです。

本書は緒言や序章に70ページほど充てられ、目録の構成、研究の視点などが詳細に述べられています。宮廷劇場の上演記録をもとに、演奏された主要楽曲をまとめた表なども見出せます。しかし、実際に目録を使う際には冒頭の「略語および略号」の参照が必須でしょう。作曲家の作品目録の略語と正式タイトルが照合できますが、目録中の音楽作品の確認を容易かつ確実にしてくれます。

目録を手にとって

目録は3部構成です。各ページの上段に目録(原本)をページごとに写真複製して収め、下段は上段のデータを活字にして読みやすくしたり、調性や作品目録の略語などを付加しています。

第1部(75～250ページ)は交響曲、序曲、幕間音楽が対象で、作曲者名、同一作曲者の本書での作品数、曲種とインチピット(歌い出し部分の楽譜)、パート譜、弦楽器奏者の数という5項目が設けられています。下段ではインチピットが省かれ、調性と作品目録が記載されています。

第2部(251～310ページ)は第1部の台帳のように思えます。第1部では作曲者別に配列されていた目録が、ここでは違います。項目は「シンフォニー」の欄に作曲者名、以下、調性、同一作曲者の本書での作品数(何度か登場する場合あり)、全体の作品数を表す番号、標題なしの欄にはA、B、Cなどの格づけ(下段には調性や作品番号、作品目録など)が続きます。同一の作曲家が何度も出てくるのは、異なる時期に楽譜を購入したからだといえます。

第3部(311ページ以降)は協奏曲と室内楽曲。まずジャンル(ヴァイオリン協奏曲、四重奏曲など)ごとに分け、ヴァイオリン協奏曲では作曲者、同一作曲者の本書での作品数、インチピット(下段では調性、作品番号、作品目録)、パート譜、弦楽器奏者の数が記されます。四重奏曲以下は声部や弦楽器奏者の数などが省略されています。

369ページ以降の「人名および作品索引」は目録の作曲家と作品が一覧できます。目録部分のページには、上の余白の中央部分に「fol.○○Or(またはv)」とありますので、該当箇所へ戻ってください。

本書で出会った作品をOPACで探してみるのも楽しいです。一人の作曲家が同じ調性の作品を何曲か書いている場合もありますが、そんな時に威力を発揮したのが作品目録(作品番号)でした。

ボビー・マクファーリン (Bobby McFerrin)

— 声の魔術師・指揮者 —

高田 涼子

ピアノは「楽器の王様」といわれますが、声だけで全てのパートを演奏できる人は数少ないと思います。日本でもボイスパーカッションが流行っていますが、マクファーリンは20年以上前に超越技巧を披露し、別名「声の魔術師」と呼ばれています。

指揮+うた

みなさんは、バッハの《平均律》第1巻第1番のプレリュードBWV.846を、全ての音をはずさずに歌えるでしょうか？なんと彼はそれを実演しています。バッハ=グノーの《アヴェ・マリア》で、バッハのパートを彼が指揮をしながらソロで歌い、グノーのパートの聴衆との大合唱で、絶妙なハーモニーを紡ぎだしています。ジャック・ルーシエ・トリオとのBWV.140の主題によるインプロヴィゼーションも見応えあり。

『スウィング・バッハ』請求記号●VE540

また、チェリストのヨーヨー・マのドキュメンタリー番組『タングルウッドの思い出』請求記号●VD3217では、ベートーヴェン《交響曲第7番》の第2楽章について議論を交わし、振りながら歌っています。他にも「ヴォイス協奏曲」が聴けるCDがあります。

『ペーパー・ミュージック』請求記号●XD33069

Don't worry, be happy

彼の名前を聞いたことがなくても、映画「カクテル」の主題歌《Don't worry, be happy》は、一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。ヴォーカルだけでなく、ベースやパーカッション等も一人で多重録音をして、1988年にはグラミー賞3冠を達成しました。『Do you really want to hurt me』請求記号●XD31724

ちなみに、このタイトルはインドの宗教家メハー・ババがよく用いた言葉として知られています。

インプロヴィゼーション

私が初めて彼を意識して観たのは、『シリーズ楽器 そのルーツと魅力をさぐる (人の声)』請求記号●VB1158*でした。このビデオの中で「あらゆる楽器の標本ではないか」と評されています。幅広い音域であらゆる声質で歌い、また、口だけでなく手や身体を叩いたりして様々な音を奏でていました。一体この人は何者?!と興味を持ち調べてみたところ、前述の有名な曲を自作自演した人だと判明したのです。

彼の即興演奏は素晴らしく、チック・コリアとのデュエットは見事！NYのブルーノートで、チック還暦祝いの演奏、会場と一体感となる《スマイル》は必見です。『Rendezvous in New York』請求記号●VE554-562

モーツァルトのインプロヴィゼーションを、チックと共演しているCDもあります。

『プレイ・アマデウス』請求記号●XD36592

多才多才

彼の音楽表現は、知れば知るほど感動の連続でした。マクファーリンは、器乐的唱法を特徴とするジャズシンガーですが、大学卒業後はピアニストとしてデビューしていました。そして、現在は指揮者としても活躍しています。40歳でジュリアード音楽院に入り、指揮の勉強をしました。音楽への興味は、オペラ歌手の父親を持つ影響があるのかもしれませんが。今までに、新日本フィルハーモニー交響楽団、全米やヨーロッパの主要オーケストラを指揮しています。

※OPACでは探せません。AV資料室にあるバインダーでご確認ください。

●たかだりょうこ「わんわん物語」の《シャム猫の歌》も歌っていますよ。『マッド・アバウト・マウス』請求記号●VD1037

図書館と著作権と資料の複写

(その6)

今回は、図書館を離れ、学内のコピーコーナーやコンビニでの複写が「著作権法」のどのような条文に基づいているかを説明しましょう。まず「第30条」の条文をご紹介します。

-----著作権法

第五款 著作権の制限 (私的使用のための複製)

第三十条 著作権の目的となつてゐる著作物（以下この款において単に「著作物」という。）は、個人的に又は家庭内その他これに準ずる限られた範囲内において使用すること（以下「私的使用」という。）を目的とするときは、次に掲げる場合を除き、その使用するものが複製することができる。

一 公衆の使用に供することを目的として設置されている自動複製機器（複製の機能を有し、これに関する装置の全部又は主要な部分が自動化されている機器をいう。）を用いて複製する場合

二 技術的保護手段の回避（技術的保護手段に用いられている信号の除去又は改変（記録又は送信の方式の変換に伴う技術的な制約による除去又は改変を除く。）を行うことにより、当該技術的保護手段によつて防止される行為を可能とし、又は当該技術的保護手段によつて抑止される行為の結果に障害を生じないようにすることをいう。第百二十条の二第一号及び第二号において同じ。）により可能となり、又はその結果に障害が生じないようにした複製を、その事実を知りながら行う場合

三 著作権を侵害する自動公衆送信（国外で行われる自動公衆送信であつて、国内で行われたとしたならば著作権の侵害となるべきものを含む。）を受信して行うデジタル方式の録音又は録画を、その事実を知りながら行う場合

2 私的使用を目的として、デジタル方式の録音又は録画の機能を有する機器（放送の業務のための特別の性能その他の私的使用に通常供されない特別の性能を有するもの及び録音機能付きの電話機その他の本来の機能に附属する機能として録音又は録画の機能を有するものを除く。）であつて政令で定めるものにより、当該機器によるデジタル方式の録音又は録画の用に供される記録媒体であつて政令で定めるものに録音又は録画を行う者は、相当な額の補償金を著作権者に支払わなければならない。

法律文書というのは、一読しただけでは内容が理解できないものが多いのですが、ひらたく言えば、第30条は「個人や家庭内などの限られた範囲での私的使用には、作者の許可がなくても著作物を複製できる」という内容なのです。ここでいう複製とは、図書や楽譜の複写、CDの録音、テレビやラジオ番組の録画・録音等を指します。皆さんが日常的に行っている行為が多く含まれていますね。以前、この欄でも説明したように、著作権法は著作権者等の権利の保護を図ることが第一の目的ですが、その公正な利用に留意することも規定されています。そのため、一定の条件を満たせば著作物を許可なく複写できるという第30条の規定は、著作物の特性や利用形態等の観点から、私たちの社会や文化を円滑に動かしていくための大事な「制限規定」といえます。

「個人的又は家庭内…限られた範囲内での私的使用」には明確な基準があるわけではありません。でも、かなり狭い範囲内と考えるのが本来の趣旨です。自分自身や家族のため、友人間の楽しみのための複製なら認められています。しかしサークル等の利用で50部もの複製を行うとすれば、それは明らかに逸脱しているとみなされます。また、ある複写物が、個人の趣味や楽しみのための複写なのか、仕事上で必要な複写なのか曖昧な場合もあるでしょう。「私的な使用とはどこまでか」という問題は、今なお解決しきれない問題となっています。

なお、コンビニのコピー機は、第一項第一号にいう「公衆の…自動複製機器」にあたりますが、下記に示す附則により、「当分の間」その適用を除外されています。

附則 (自動複製機器についての経過措置)

第五条の二 著作権法第三十条第一項第一号及び第百十九条第二項第二号の規定の適用については、当分の間、これらの規定に規定する自動複製機器には、専ら文書又は図画の複製に供するものを含まないものとする。

この第30条は、1970年制定後、2009年までの間に、一部改正および第1項1-3号、2項の追加という経過を経て、その適用範囲が徐々に限定されてきました。次号以降では、その内容と背景についてみていきましょう。

(hm)

雑誌の部屋 ①

「雑誌の部屋」は、当館が所蔵しているたくさんの雑誌を、もっとみなさんに手にとっていただけるよう紹介するコーナーです。

第1回は、官公庁、協会が刊行する雑誌です。いずれも音楽専門誌ではありませんが、たまにはこうした冊子をめくって、日本の芸術文化の動き全体を眺めてみてはいかがでしょうか。

『文化庁月報』

編集／文化庁 月刊



請求番号●P1312

『文化庁月報』は、その名のとおりに文化庁の発行する月刊誌。日本の文化政策や制度、さまざまなジャンルの文化事業や活動を紹介するものです。例えば、2011年3月号の特集は「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次基本方針）」。今後日本の芸術文化がどのような方針で動いていくのか、何に重点が置かれているのかなどが説明されています。また、7月号には、特別寄稿「音楽の力を信じて 仙台フィルの2か月」が掲載されています。

*『文化庁月報』は今年の4月号からWEBコンテンツになり、文化庁のホームページで公開されています。

『メセナnote』

編集・発行／公益社団法人
企業メセナ協議会 季刊



請求番号●P5401

「メセナ」とは「芸術文化を支援すること」を意味するフランス語 (mécénat)。企業によるメセナ (企業メセナ) は、長年にわたり日本の芸術文化を牽引し、支えています。

『メセナnote』は、芸術文化に関する新しい動きや活動を、企業メセナの視点から発信しています。冊子の柱はテーマ性の高い「特集」。例えば、2011年夏号は「東日本大震災、文化をめぐる動き」が緊急特集として組まれています。そのほか、企業トップへのインタビュー、全国のメセナ活動の紹介記事、文化政策に関するコラム、企業の助成や顕彰情報など、企業メセナの現場からの実践的な情報も知ることができる冊子です。

図書館のら・ご・き

◇ 自由閲覧室に開架図書を設置

少し機能が変ってきた自由閲覧室にもう1つの機能として、開架図書を設置することにしました。

皆さんに手軽に読んでいただければ、という思いから、図書館委員会の先生方と一緒に選定しました。第1次選定として、図書館の選書方針では購入できないような文庫を自由閲覧室の開架図書とします。以下の文庫が並びますので、是非ご利用ください。

- ・光文社文庫 古典新訳文庫（現時点で入手可能なもの約100点）
- ・ちくま文庫 ちくま文学の森（全10巻）
- ・ちくま文庫 文庫で読む日本文学/ちくま日本文学（全40巻）
- ・新潮文庫の100冊2011
- ・ポプラ社百年文庫（100巻）

また、一緒に参考図書室から下記の図書を移動させます。引き続きご利用ください。

1) 推薦図書

授業を受けて抱いた興味をさらに発展させるため、また講義内容を補うため、ぜひ読んでほしいと先生方から推薦いただいたものです。講義要目、図書館ホームページに掲載されたリストをご覧ください。

2) 語学の多読本

英語の授業用に設置された多読本でしたが、その後、ドイツ語を追加、更に他の言語も追加する予定です。また、多言語の本を選定し、パワーアップします。

3) 今月の葉

先生方の心に残った1冊を紹介していただくコーナーです。昨年9月から、参考図書室の入口をコーナーとしましたが、自由閲覧室入口に場所が変わります。

※これらの開架図書の貸出手続きは、利用者自身で行う方式となります。そのため、退館ゲートの前に持ち出し防止ゲートを設置しますので、手続き忘れのないように、ご協力ください。

◇ 督促・予約のメール配信へ移行

現在、督促・予約は「はがき」でお知らせしていますが、10月から（予定）、メール配信へ移行します。学内LANの敷設に伴い、学内者（学生、大学院生、教職員）にメールアドレスが発行されましたので、はがきの印刷費、切手代の費用削減のために、それを使用させていただきます。学内者の皆様には、今後、kunitachi.ac.jpのアカウントでのメールの確認をお願いします。

・督促について

返却日3日前には「もうすぐ返却日です」、返却日翌日には「返却日が過ぎました」、その後1週間後、1か月後・・・3年後まで自動配信されます。未返却資料に予約が入った場合には、その翌日に「予約が入りましたので返却してください」とお知らせします。

残念ながら、延滞が多いのも事実ですので、返却期限日までの返却、あるいは継続の手続きをしていただくよう、改めてお願いします。

・予約について

はがきと同様、メールでお知らせした日から7日間、予約した方に権利がありますので、他の利用者は借りることができません。もし、予約した資料を利用しない場合には、是非、予約の解除をお願いします。次の利用者が待っています。

※図書館資料は皆さんの学費で購入した貴重な共通財産です。

大学院生の頃、夏の一ヶ月程をヨーロッパに出かけて過ごした。目的は勉強などではなく、いろいろな国の鉄道に乗ることで、フランスのメトロやTGV、ドイツのトラムや国際寝台列車、スイスの登山鉄道などがねらいであった。実はもう一つ目的があり、パリを訪れたかったのである。子どもの頃、銀座に勤め先があった父が時々ケーキを買ってきてくれた。ケーキもうれしかったが、私にはそのケーキ屋の包装紙が宝物であった。パリの街並が金色のモノトーンで描かれていたのである。フランス語はわからず、最初は単なる想像上の地図かと思っていた。しかし、それが実在するフランスの首都パリとなれば自ずと見方も変わり、図書館でパリに関する本を探した。その本の写真と包装紙を見比べながら、凱旋門から放射状に広がる道路、そこに描かれている家々、街の中を蛇行するセーヌ川などを見つけての一喜一憂。どれひとつをとっても魅力的で、小学生の私にとってパリはあこがれの街になっていた。

ようやく二十代半ばで、そのパリを訪れる機会が来た。では、どのようにしてパリに入るか。ここはやはり鉄道であろう。ドイツのフランクフルトを朝出発し、2時頃にパリ東駅に到着。列車から降りてホームを歩いている時の何とも言えぬ喜び。十数年来の夢がかなった達成感。窓からの風景も心躍るものがあったが、あのパリの香りに酔いしれ、シャンゼリゼを闊歩する美しいパリジェンヌに目が奪われた数日であった。パリは想像通りすてきな街であった。旅は楽しい。思い立って出かける旅も良いが、計画を温めてようやく出かける旅はさらに魅力的である。実現を目指して温めている計画がひとつある。アフリカのマリのジェンネという街に砂でできたモスクがある。そこを訪れること。そのモスクの前に立った時、私は何を思うだろう。

図書館の **ら・ご・き** ~続き~

◇ 新1号館竣工記念のテーマ展示開催

9月の授業から使用開始となった新1号館の各階の壁のサインパネルには、図書館所蔵の貴重資料の画像が使用されています。30カ所にパネルが設置されていますので、探してみてください。竣工記念として、ブラウジングでのテーマ展示を行い、貴重資料そのものの展示を行います。デザインパネルと合わせてご覧ください。

◇ 読売連続市民講座 第6回は図書館がテーマ

4月から国立音楽大学と読売新聞社立川支局との共催で、読売連続市民講座「音楽づくりの現場から～心に癒しを、社会に潤いを」が開催されています。10月1日(土)の第6回は「音楽図書館大忙し～資料提供の現場から」と題して、図書館が担当します。図書館委員の先生方にもご協力いただき、資料と関連した演奏をしていただく予定です。

事前申し込みは不要、参加は無料です。会場：講堂大ホール、時間：13:30～15:00

主任司書 松浦淳子

CD

「いたずらっ子の薦め」

演奏学科鍵盤楽器専修

4年

小竹真鈴

「レドシレドッシラソシラッ…」

バイオリンたちの高らかなメロディ。それを合図に、戦士たちは椅子から一斉にスタートダッシュを切り、掃除用具入れに群がった。オーケストラの中に混じるタイプライターの音と共に、一つ…二つと箒が減っていく。キーを叩く軽快な「カタカタ」と、掃除用具入れが軋む「ガタガタ」が妙にマッチして楽しい。そんなことを考えている間に箒はなくなっていた。無念。そして見事箒を手に入れた勝者たちは、曲に合わせ上機嫌で床掃除に取り掛かった。

アンダーソンとの出会いは小学校の時だった。掃除の時間のテーマ曲として流されていたのが、彼のヒット曲『タイプライター』。題のとおり、目まぐるしくタイプライターを叩くビジネスマンを描写した作品だ。ところが小学生だった私は、その音がまさかタイプライターだなんて知りもせず、『そうじのきょく』として楽しんでいった。カタカタ「机の移動だ」ガタガタ。「チーンツシャツ」という改行音と一緒に、ごみを塵取りにシューティング。

ふとした生活音がアンダーソンの曲に混じると、新たな音楽となる。曲自体が、彼のユーモ

アとセンスで、音という音を「音楽」に変えてしまっている作品だからだ。その発想は、まるで小学生のいたずら。『サンドペーパー・バレエ』では、上品なバレエの舞台に紙やすりを登場させてしまうし、『シンコペイテッド・クロック』では、時をきちんと刻んでいるはずの時計が、思わぬところでリズムに乗って弾む。さらに、彼の得意とするもう一つの類のいたずらとして、『演奏者集中攻撃』がある。『ラッパ吹きの日』では、ラッパ手たちに休日どころか休む暇も与えないほどの激務を強いる。それに必死に答える奏者たちのスリリングなプレイを、想像しながら聴くのも面白い。

音大生ともなると、素晴らしい演奏を聴くことが当たり前となってしまう、音本来の魅力を発見する喜びはついつい忘れがちだ。しかし完成された演奏でなくても、私たちの周りにはこんなにも胸躍る音楽が溢れている。もう一度子どもに戻り、心赴くままに耳を傾けてみてはどうだろう。いたずらっ子・アンダーソンが、その案内人を喜んで引き受けてくれるはずだ。



請求記号●XD55682
Fiddle Fiddle :15 Favorites/ by
Leroy Anderson (Vanguard
Classics :COCQ83883)

●こたけまりん 司書になるため猛勉強中。勉強する場としてもたしても図書館に通うのですが、その寝心地…じやなく居心地の良さを一言、ただ…まますます図書館が好きになりそうです。

BOOK

「ビルギット・ニルソン」
オペラに捧げた生涯

演奏学科声楽専修

3年

瀧川幸裕

僕は今から3年前、高三の半年ほど月2回のペースで、地元の函館から札幌までレッスンに通っていた。片道3時間かかるJRでの移動は行きはMDを聴き楽譜を確認しながら、帰りはいいてい札幌駅の隣にある紀伊国屋書店で買った本を読みながら、時間をつぶしていた。

今紹介する「ビルギット・ニルソン」オペラに捧げた生涯」もその時買った本で、スウェーデン出身のソプラノ、ビルギット・ニルソン（1918〜2005）の回想録である。

彼女は農家の一人娘として生まれ、そこからコツコツと努力をかさね、スカラ座やウィーン国立歌劇場を始めとする世界の名歌劇場で歌うまでに至った。ワグナーやプッチーニの『トゥーランドット』を得意とするソプラノで、重いソプラノかと思いきや、その高音はまるでクリスタルのように、キラキラしている。

この本を買うまで、実は彼女の事は良く知らなかった。それなのになぜ買ったのか、と言えば、立ち読みでパラパラ読んで感じがおもしろかったからだ。全体的にどんな話題もユーモアを忘れない文章で、400ページあるが、一気に読める。

最初に習った教師が最悪で悩みなながらも発声を習得した事…デビュー…バイロイトやメトロポリタン歌劇場のこと…カラヤンとの確執（メタメタに書いている）…スタジオ録音の思い出…そして夫のこと。彼女の人生…近代のオペラ史といったところだ。

印象的なエピソードの一つとして――

《トゥーランドット》にはトゥーランドットとカラフがユニゾンでハイCを出す場面がある。

テノールのフランコ・コレツリと共演する際は、そのハイCをどれだけ延ばす事ができるか競っていたそう。たいていはニルソンが負けた。

あるメトロポリタンでの公演のこと、ニルソンが少しだけ長く出せた。その次の瞬間、コレツリは怒り狂って、まだ出番があるのに（謎ときの場合）、ステージからいなくなってしまった。

――少し子供じみているが、そのような意味スリリングはステージを見てみたい、と思うのは僕だけだろうか。少し長いと思うが、是非とも読んでほしい一冊である。



請求記号 ● J114-270
『ビルギット・ニルソン―オペラに捧げた生涯』ビルギット・ニルソン著
市橋和子訳 春秋社

●たきかわゆきひろ 昔から本を読むことが好きで、小説から戯曲伝記など適当に読んでいた。そのことがいくらか今後に立っているかと思いついて

楽譜

作曲家と演奏家による

解説版

音楽文化デザイン学科音楽創作専修 3年 齋藤卓

ご紹介させていただく楽譜は、M. ラヴェル作曲《水の戯れ》のヴラード・ベルルミュテール校訂による解説版です。解説版とは、ある曲について演奏家または別の作曲家が、自分の解釈を伝えるため、様々な指示や解説、校訂をした版のことです。解説版はある曲に対する一つの解釈を示してくれるものですが、原典版にはない強弱記号等が多くあり、作曲家の意図を無視しているのではないかと、という批判もあります。しかしこの楽譜を校訂したベルルミュテールは、実際にラヴェルのもとで演奏、そこで得た経験をもとに楽譜へ指示を記しています。ベルルミュテールはそのときの様子についてこう前書きに記しています。

「…彼（ラヴェル）の指摘は彼の耳に聞こえた響きに基づいての意見であり、それはテンポ、ペダル、音質についてでした。その指摘によりラヴェルの音のメッセージは生命を吹き込まれたのです。」

つまりこの楽譜はベルルミュテールによる演奏家としての解釈と同時に、ラヴェルの望んだテンポや響きの解釈が残されており、演奏家の解釈と作曲家本人の解釈が同時に感じられる解

釈版です。解説版と原典版の間に生じる問題は先に述べた通りですが、参考になる点は多くあると思います。

実際に楽譜を手にとって見ると非常に多くの書き込みがあることに驚かれます。指使い・強弱記号・フレージング記号やペダル記号の他にも、ラヴェルが自分の曲に対してどう考えていたかも記され、様々な可能性を持ったものとなっています。それらの書き込みは色刷りで区別され、元の楽譜との違いもわかるようになっています。

私たちはもうラヴェルに教えるを請う訳にもいきませんので、この楽譜はこの曲を演奏する方々にとつて、またラヴェルを好きな方々にとつて非常に興味深いものではないかと思えます。ベルルミュテール解説の楽譜は《水の戯れ》以外にも何曲かありますので是非一度探してみたいかがでしょうか？そして、この楽譜を手にとって頂いた皆様により、ラヴェルのことを知るきっかけになつてもらえたらならば、紹介者としてはこの上ない喜びです。



請求記号 ● G29-519
ラヴェル ピアノ曲集II
水の戯れ 音楽之友社

●さいとうすべる 提出物を期限ギリギリで出す習慣を改めようと日々努力。でもなぜかギリギリになればなるほどやる気が出ます。良くないですね(笑)

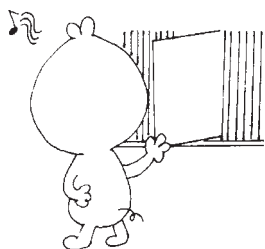
夏休み前に借りた資料の返却は

7月以降に借りた資料は、もう返しましたか？忘れずに早めに返却しましょう。返却期限はOPACの利用状況から確認してください。

CDの返却前に資料の確認を

「CDや解説書が入っていないかった」「自分のCDを入れてしまった」「CDや解説書を請求記号の違うケースに入れてしまった」などのトラブルがしばしば見られます。

これらの場合、返却処理ができませんので、CDの返却前には今一度資料が揃っているか確認をお願いいたします。また、CDを借りた際に資料の状態に不自然な点がありましたら、AVカウンターまでお知らせください。



資料の水濡れに注意

返却された本や楽譜、CDケースが水で濡れているものが見られます。雨に濡れたり、ペットボトルの水滴が付くというのが、主な理由のようです。資料を傷める原因になりますので、袋に入れる、ペットボトルと一緒に入れ物で持ち運ばないなど、資料が濡れない扱いをお願いいたします。

TAC便の開始は

9月2日(金)から開始します。当館で所蔵していない資料でもTAC加盟館にある場合、TAC便を利用すれば当館資料と同じように利用できます。申込は総合受付・登録カウンターで。

がんばって教育実習

実習に行かれる方は、貸出カウンターで「教育実習」と申し出てください。和図書・楽譜の貸出期間が2週間から4週間になります。CD、映像資料の教育実習貸出は行っていません。

テーマ展示 in ブラウジングルーム・AV資料室

6月20日(月)～7月29日(金)

生誕100年 ニーノ・ロータ

企画●国立音楽大学附属図書館広報委員会

『ゴッドファーザー』『ロミオとジュリエット』『道』などの映画音楽で有名なニーノ・ロータ。しかし、彼はクラシック作品も多数遺しています。今回の展示では、今年生誕100年を迎えたニーノ・ロータの映画音楽関連資料とクラシック関連資料の両方をご紹介します。

8月29日(月)～9月30日(金)

新1号館を歩こう
—サインパネルに使われた図書館所蔵楽譜—

企画●国立音楽大学附属図書館広報委員会

いよいよレッスンやアンサンブル等での使用が始まる新1号館。地上4階、地下1階から成るこの建物内には、当館が所蔵する貴重楽譜をもとにデザインされたサインパネルがあちこちにあります。今回の展示では、サインパネルとそのもとなった資料をご紹介します。

ガイダンス

6月27日(月) 酒井美恵子先生ゼミガイダンス(4年・音楽教育)
7月 8日(金) 塩原麻里先生ゼミガイダンス(4年・リトミック)
7月19日(火) 塩原麻里先生ゼミガイダンス(4年・幼児教育)

ゲスト

8月 2日(火) 昭和音楽大学大学院生 24名



